

## はじめに

山口 幸二

立命館大学国際言語文化研究所では、一昨年秋から「ヨーロッパ統合」「多元主義カナダ」「ポストアパルトヘイトの南アフリカ」「オーストラリアの鏡・日本の鏡」の標題で連続講座「国民国家と多文化社会」を開催してきました。11月には引き続き「アジアにおける国民統合とエスニシティ」を開催します。また本年7月には共催でシンポジウム「多文化主義・多言語主義の現在—国民国家の臨界?」を開催しました。それらの中で、多言語の問題が無論取り上げられ、それぞれの地域によって多言語の捉え方に違いがあることが分かりましたが、議論は多文化に多く集中し多言語の問題はまだそれほど深められていません。近代国民国家のほとんどは「一言語主義」をとることによって支配の効率化と「国民意識」の統一を図ってきました。また植民地においては「宗主国語は絶対的な力を持ち、いまなおその陰は尾をひいています。

ことばは支配の道具（武器）であり、またコミュニケーションや思考の道具にすぎないのでしょうか。道具や武器であれば、そこには必ず優劣がともなってきます。言語の境界をどこに置くかは難しい問題ですが、現在の言語の数は数千といわれています。現在の「独立主権国家」は二百足らずとすると、もともと国語と国家には必然的な関係はないともいえます。「多言語主義」が言われる一方で、いま言語の数は確実に減少してきています。ある調査では2100年までに生き残っている言語の数は約六百としています。言語の消滅はそれほど難しいことではありません。その言語を使っている人間が何らかの理由で使わなくなれば、その言語は消滅します。

「言語は経済力」という見方からすれば、圧倒的に強力な英語といえどもその位置は安泰ではありません。「多文化・多言語」社会が言語の「変種」にも寛大であるとすれば、英語の「変種」にもそうで現におおくの「変種」が存在しています。スペイン語やフランス語やルーマニア語がラテン語の「変種」であった歴史があるからです。

ことばの問題は、常日頃はあまり意識しないだけに難しい問題を秘めています。

今回は言語の問題に鋭い視線を向けておられる三人の講師をお迎えし、広く討論の場を設けたいと思います。

司会 本日は公開シンポジウムに多数お集まりいただきありがとうございます。

このシンポジウム開催の趣旨はすでにお手もとのチラシに書いてあるとおりです。多文化主義の問題はすでに多くのところで、様々な議論がなされています。そして一民族・一文化という単純な多文化を越えて、「多」によりも「文化」の質に議論は進みつつあるようです。それに比して多言語問題の議論はそれほど活発にはなっていないようです。「多」とは何か。「言語」の境界とは何か、あるいは他者と分かり合うための「共通語」の存在など難しい問題が予想されます。

多文化主義の立場をとっているところでも、「共通語」はほぼ「英語」です。この夏「国際フランス語教授連合の世界大会」が東京で開催されています。「英語帝国主義」への対抗といった見方もあります。旧植民地「宗主国語」の陰はいまでも引き続いており、多言語の問題を複雑にしています。

日本（語）も例外ではないと思われます。かつての日本も「帝国」としての「多文化・多言語」の時期を持っていました。それが「レトリック」としての、であったとしても。戦後のわれわれは幸か不幸か「単一」の立場をとり（とらされ）、かつての状況を忘却のかなたへ追いやりと同時に、多文化・多言語を考えにくい状況にしています。

本日はそれぞれの分野のスペシャリストであるお三人の先生方、大谷先生には「世界における英語教育の実態と英語の位置」、三浦先生には「フランスの多言語主義戦略」、安田先生には「戦前・戦中期日本の言語政策—『満洲国』における多言語政策の内実」と題したお話をうかがい、次いで本学、国際関係学部 of 西川先生、文学部の児玉先生、法学部の大橋先生にコメントをいただき、その後討論という形で進めたいと思います。

なお司会は本研究所の専任研究員で法学部の山口がつとめさせていただきます。よろしく願いいたします。

それでは大谷先生からお願いいたします。

大谷 この前の日曜日が12月8日（開戦記念日）でした。太平洋戦争が始まってから、もう55年になりますが、私のような歳のものには、あの戦争は教室で習った歴史的事実ではなくて、小学校2年生の時に実際に体験致しました生活体験ですから、その後、あの戦争が戦後に何を遺したか、あの戦争から私たちは何を学んだかということ、私なりに、振り返ることが多いわけです。仕事柄、海外に出かけることが少なくありません。特にヨーロッパに行きましていつも感じますことは、ヨーロッパの